

SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★

| | |
|---|-----------|
| 12日の殺人 | |
| 2022年／フランス映画 配給：STAR CHANNEL MOVIES／114分 | |
| 2024（令和6）年3月20日鑑賞 | シネ・リーブル梅田 |

Data

2024-27

監督：ドミニク・モル

脚本：ドミニク・モル／ジル・マル
シャン

原作：ポーリーヌ・ゲナ作「18.3:
Une année à la PJ」（刑事訴
訟法 18.3 条：司法警察での
1年）」

出演：パティアン・ブイヨン／ブ
ーリ・ランネール／テオ・チ
ヨルビ／ヨハン・ディオネ/
ティヴー・エヴェラー／ポー
リーヌ・セリエ

みどころ

日本は 95%の検挙率を誇っているが、フランスでは、年間 800 件以上起
る殺人事件のうち、約 20%は“未解決”。そんな“未解決事件”に焦点を當
た映画は、『殺人の追憶』（03 年）や『ゾルディック』（07 年）等、名作が多
い。しかし、『悪なき殺人』（19 年）で有名なドミニク・モルが、「“未解決
事件” — それは、人間の欲望を刺激する。」に、焦点を當て作った本作は？パ
ーティーからの帰宅途中の若い女性が、ガソリンをかけられて焼死！こんなこ
とをする犯人はきっと彼女にフラれた男だから、元カレを丹念に捜査すれば検
挙はすぐ！そう思ったが、元カレが多い上、一人また一人と捜査線上から消え
ていったから、アレレ、アレレ・・・？

そして、3 年。“未解決事件”で終わりそうな本件は、新たな女性判事と女
性刑事の登場によって、全く別の展開を見せていくが、さて結論は・・・？

フランスは先進国トップの“女性活躍社会”。そんな価値観を一変させる、
セザール賞、最多 6 冠ゲット作品は必見！

■ “未解決事件”に焦点を！セザール賞最多 6 冠をゲット ■

2016 年 10 月 12 日の夜に起きた殺人事件をネタにしたから、本作のタイトルは『12 日
の殺人』。それだけではあまりに安易だが、そんなフランス映画が、第 48 回セザール賞で
最優秀作品賞、最優秀監督賞等最多 6 部門を受賞したのは、「“未解決事件” — それは、人
間の欲望を刺激する」に焦点を當てたためだ。

本作冒頭、「仏警察が捜査する殺人事件は年間 800 件以上。だが約 20%は未解決。これ
はそのうちの 1 件だ」との字幕が流れるが、その数字にビックリ！日本での殺人事件の検
挙率は 95%という高い数字を保っているそうだが、それでも、年間数十件の未解決事件が

発生しているらしい。『007』シリーズに代表される“スパイもの”では、正義が勝ち、悪が敗北するというスタイルが定着しているが、ポン・ジュノ監督の『殺人の追憶』(03年)（『シネマ4』240頁）や、デヴィッド・フィンチャー監督の『ゾディアック』(07年)（『シネマ15』283頁）では、殺人犯を追う刑事たちの努力が徒労に終わり、殺人事件は結局“未解決事件”になってしまったイライラ感だけが残ってしまった。本作もそんな“未解決事件”をテーマにした映画だから、全編を通じて刑事たちのイライラが充満しているが、そんな映画が、なぜセザール賞6冠をゲットしたの？

■■原案は？監督は？捜査官の心情にフォーカスを！■■

本作の原案は、ポリーヌ・ゲナの小説『18.3: Une année à la PJ (刑事訴訟法 18.3条: 司法警察での1年)』。監督は、『悪なき殺人』(19年)のドミニク・モルだ。第2章「ジョゼフ」を“羅正門方式”で描いた『悪なき殺人』は、転調が連続するメチャ面白い映画だった（『シネマ50』128頁）。同監督は、約500頁以上ある同小説の中の約30頁だけに基づいて本作を完成させたそうで、自ら「かなり珍しい脚色だと思います」と語っている。

『殺人の追憶』は、韓国で1986年から91年にかけて現実に起きた「華城連続殺人事件」を題材として、捜査に執念を燃やす対照的な個性の2人の刑事と、次々に容疑者とされていく男たちの姿をリアルかつ骨太に描いた見事な作品だった。そして、そこでは、何よりも登場人物たちのキャラクターが鮮明に示されていたため、争点が明確になっているのが良かった。同作は、1986年10月に若い女性の変死体が発見されるシーンから始まったが、本作では、2016年10月12日の夜、21歳の女性クララ（ルーラ・コットン・フラビエ）が、友人たちとのパーティーの帰りに突然何者かにガソリンをかけられ、火を放たれるシーンが登場する。こんな異常な殺し方をする犯人は、きっとクララに振られたことに逆恨みをしている男！？誰もがそう考えたうえ、それなら犯人の特定と検挙は簡単！グルノーブル署で引退する殺人捜査班の班長マルソー（ブーリ・ランネール）に代わって、新たに班長に就任したヨアン（バスティアン・ブイヨン）たちの刑事はそう考えたが・・・。

■■元カレが次々と捜査線上に！しかし・・・？■■

クララの親友の女の子ナニー（ポリーヌ・セリエ）の協力によって、クララと交際歴のあった男たちの名前が次々と出されたから、それを丹念に捜査していくば犯人はすぐに特定できるはず、だったが、現実には多くの元カレたちが次々と捜査線上に上っては消えていくことに。その第1は、彼女を「燃やしてやる」というラップを自作していた元カレのギャビ。第2はクララに火をつけた際のライターと思しきものを調べる中で拘束した、近隣の菜園小屋に住む、無職の男ドニだ。ギャビは本命中の本命だったが、ドニは捜査線上に情報が全く上がっていなかった男。そんな男までクララと関係を持っていたとは！このようにクララの奔放な男関係が次々と明らかになっていく中、ヨアンがナニーに対して、「なぜ、ドニのことを知らせなかったのか？」と詰問したのはある意味で当然だ。ところが、まるでクララの方に非があるかのような、そんなヨアンの質問に納得できないナニー

は、逆に「なぜ彼女が殺されたのか？それは女の子だったからだ。」と、ヨアンに対して詰め寄ったから、問題はさらにややこしいことに・・・。

■□■2人の刑事は空回り？刑事は男社会？そこに欠陥が！■□■

『殺人の追憶』は、対照的なタイプの2人の刑事が殺人事件の捜査に執念を燃やしていたが、結局、”未解決事件”に終わってしまった。本作でも、班長を引退したマルソーが、新班長に就任したヨアンと共にクララ殺人事件の犯人検挙に執念を燃やしたが、結局犯人にたどり着くことができなかつたのは一体なぜ？それは、ひょっとして男ばかりの刑事で構成された捜査陣が、ナニーの言うように、「クララを尻軽女のように扱い、彼女が殺された理由を女の子だから」と単純に考えていたためでは・・・？本作のパンフレットには、①門間雄介（ライター／編集者）の『12日の殺人』が肉迫する人間という存在②川口敦子（映画評論家）の「ドミニク・モルが見つめる、登場人物たちの生き方」③越智啓太（法政大学 心理学科）の「クララを殺したのは誰か、そして、ヨアンはなぜこの事件に囚われてしまったのか」、という3本のコラムがあり、それぞれ、本作の問題意識に肉迫しながら解説しているので、これらは必読だ。フランスは日本とは大違いの“女性活躍社会”的国ではなかつたの・・・？

■□■3年後。未解決事件は女性判事の登場で、新局面に！■□■

安倍派をめぐる派閥の“裏金問題”（政治資金規正法違反事件）は、検察陣の威信をかけた捜査にもかかわらず、大物政治家（？）たちは全て不起訴になってしまった。その最大の理由は、政治資金規正法違反が“形式犯”とされているためだが、同事件の理解は非常に難しいため、マスコミ報道もコメントテイターたちの発言もいゝ加減なものが多い。それと同じように（？）、クララの殺人事件が3年経つてもほとんど“未解決事件”になりかけていたにもかかわらず、ヨアンが女性判事ベルトラン（ヌーク・グランペール）に呼び出され、捜査の再開を希望されるところから、本作は前半とは全く異なる展開になっていくので、それに注目！フランスの刑事事件の捜査システムは弁護士の私にもさっぱりわからないが、映画としては、前半は完全な“男社会”だった本作が、後半からは女性判事ベルトランの登場と、男所帯だった刑事チームの中に新たに若手女性捜査官ナディア（ムーナ・ファレム）が加わることによって、新たな展開になっていくことに。

女性刑事のアイデアは、クララの3周年にはきっと犯人がお墓に現れるから、隠しカメラを取り付けておけば・・・、というものだったが、そんな思いつきみたいなアイデアに本当に予算とマンパワーを注ぎ込むことができるの？私にはそんな疑問もあったが、ベルトランのアイデアは見事に的中！果たして隠しカメラに映っていたものは・・・？やっぱり男ばかりの所帯ではダメ！そこに女性の視点が加わらなければ・・・。そんな面白い展開にビックリ！さすが、フランス映画は奥が深い。もっとも、その結果がハッピーエンドになれば良いのだが。さあ、本作の結末は・・・？

2024（令和6）年3月28日記